

腕

シク成テ廿日許ノ事也、弓勢事ノ外弱テ覺ケレドモ、大鑄ヲ打クハセテ、手グメヲ引テタメラヒ見ル程ニ云々、井蛙抄六卷右雜談條に、西行と申ものにて候、法華會結縁のために来て候、今は日くれ候、一夜此御奄室に候はんとて、參て候といひければ、上人内にて、手ぐすねを引て、おもひつゝる事かなひたる體にて、あかり障子をあけて被出けり云々、此文、水蛙眼目群書類従本にも見ゆ物草太郎草子に、物ぐさ太郎是を見て、爰にこそわが北の方は出きぬれ、あつはれとくちかづけがし、いだきつかん、口をもすは、やとおもひて、手ぐすねにをひき、大手をひろげて待居たり云云、これ今俗力をいれんする時、手につばきばして物を執るを、手油をかふとも、又手ぐすねを引ともいへり、くすねチチ獮などの類にて、物を付るに、離れざれば、手に執物の落ざるやうに、掌に唾を加ふを、手ぐすねと云へるなり、

〔倭名類聚抄手足腕〕

陸詞切韻云、腕

鳥鳥原作鳥、今據一本改、段反、和名太々無岐、一云字天、手腕也、

〔箋注倭名類聚抄手足腕〕

應神紀、腕訓多々牟岐、神代紀、允恭紀、訓多不左、仁德紀、兩訓新撰字鏡、辟字訓太々牟支、醫心方腕訓多々牟岐、又訓字天、按多陀牟岐、見古事記八千戈神歌略、按說文作擊

云、手擊也、玉篇廣韻並云腕、手腕、玉篇又云、腕又作腕、又云、擊腕同上、又按儀禮士喪禮注、擊手後節

中也、史記索隱、掌後曰腕、急就篇注、腕手臂之節也、釋名、腕宛也、言可宛屈也、今俗呼字天、久比是也

下條詳之、

〔伊呂波字類抄字人體腕〕

腕ウテ、又々、ムキ、

〔下學集支上體腕〕

〔義經記三〕べんけいむまる、事

師の仰にもしたかはす、○中うでをし、くび引すまうなどぞこのみける、

〔新撰字鏡肉肱〕

肱古弘反、釋也、肩也、加比奈、

肱